

Title	<都市化>とノスタルジー : 都市における奄美出身者の心性
Author(s)	小林, 多寿子
Citation	年報人間科学. 8 p23-p.40
Issue Date	1987
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12862
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学人間科学部 (一九八七年二月)
『年報人間科学』第八号三三頁—四〇頁

〈都市化〉とノスタルジー

——都市における奄美出身者の心性——

小
林
多
寿
子

〈都市化〉とノスタルジー

——都市における奄美出身者の心性——

- 一、はじめに
- 二、ライフ・ヒストリー分析と〈都市化〉
- 三、〈都市化〉のプロセス
- 四、〈へいなか〉観と〈都会〉観
- 五、ノスタルジーと「集合的記憶」

一、はじめに

一九八五年一〇月二三日、尼崎市立産業郷土会館において、関西阿鉄会^{あて}の創立三〇周年の総会が催されていた。関西阿鉄会は、阪神都市圏において奄美諸島出身者がつくる多種多様な同郷団体の一つであり、この総会はすでに論じた同地域出身者の会の運動会と同様に、都市における「ふるさと」の一日としてとらえられる^①。とくに記念のこの日は、受付で『三〇周年記念誌』が参加者全員に手渡され、二〇〇名以上の会員や多くの来賓、母村・阿鉄の区長らの出席もあり、たいへんにぎやかな総会となった。

一九五五年四月に武庫川河川敷で第一回めの総会を催して以来のこの三〇年間に、関西阿鉄会は二〇数人から三二二人へと規模が大

きくなり、他方母村・阿鉄の人口は約六〇〇人から八八人へと激減した^②。そしてその期間には、阪神都市圏へ移り住んだ阿鉄出身の人たちが都市に適應し定着していったプロセスがあり、それは、地方からの人口流入によって形成されてきた日本の大都市における、人びとの都市への適應過程の一事例として位置づけられるだろう。

本稿では、このプロセスを、個人が社会に一般的な行動様式や規範を内在化して社会の成員となっていく「社会化」になぞらえて、都市的生活様式や価値観をとりいれて内在化していく個人の〈都市化〉のプロセスとしてみていく。〈都市化〉の概念は、従来の都市社会学では、人口集中や産業化によって地域社会が変化していくというおもに形態的概念として用いられてきたが、ここでは個人の意識や価値観のレベルでの変容に重点をおいた概念としてとらえる。そしてこの〈都市化〉の概念によって、地域性の大きく異なった地方から大都市へ移り住んだ人びとが、一生をかけて都市的に変容していくプロセスを考察し、都市に生きる彼らの心性^③を探っていくことをめざす。

二、ライフ・ヒストリー分析と「都市化」

「都市化」の諸相を明らかにするにあたって、関西阿鉄会の人びとのなかからインタヴューして得られた七〇才代、五〇才代、三〇才代という世代別のライフ・ヒストリーの分析によってみていくことを試みたい。

ここで分析の対象とするライフ・ヒストリーとは、D・ベルトールがいうように、現在の時点における過去の経験の再構成であり、個人の主観的経験の語られる「ライフ・ストーリー」としてとらえられるが、その物語に描かれている「話者の人生の軌跡 (Trajectoire de vie)」には個人のヒストリーがあらわれている。そこでライフ・ヒストリーが、個人の語るストーリーとしての側面と同時に、社会的歴史的コンテキストのなかで存在し、社会構造上に位置づけられる個人のヒストリーとしての側面をもあわせもつという二面性に着目しよう。

母村・阿鉄から阪神都市圏へ移り住んだ彼らのライフ・ヒストリーには、「過去」から「現在」への時間的移動だけでなく、「いなか」から「都会」へと空間的移動が内包されている。したがって、「過去」→「現在」と「いなか」→「都会」という二つの軸でマトリックスをつくと、図1のようにI「過去」の「いなか」、II「過去」の「都会」、III「現在」の「いなか」、IV「現在」の「都会」という四つの象限ができる。このライフ・ヒストリーにあらわれた四つの象限をもとに、個人が

「都市化」されていく諸相のなかでも、ヒストリーの側面から「都市化」のプロセスをとりあげ、ストーリーの側面から「都市化」された個人の意識を明らかにできるだろう。

ライフ・ヒストリー・インタヴューにおいて語られたディスクリブルは、I、II、III、IVそれぞれの象限に属するものとしてふりわけられるが、基本的には彼らの「人生の軌跡」に共通の特徴であるI→II→IVという変遷をふまえたうえでよりよく理解されるものである。たとえば、「いなか」・阿鉄を出たときの状況やきっかけ、初めて「都会」・大阪に来たときの印象、とまどいやなじめなかったこと、最初についた職業やそれ以後の転職、住居の移動などをめぐっての話がなされている。あるいは、「過去」の「都会」での阿鉄会への参加状況、「現在」の「都会」での会の行事への参加頻度やかかわり方、そして「過去」から「現在」にいたる「都会」での暮らしぶりについて語られている。これらのディスクリブルは、語っている人自身がIV「現在の都会」に位置していることを前提として、I「過去のいなか」からII「過去の都会」へそしてIV「現在の都会」へという変遷にもとづいた言及であり、「都会」へ移り住み、二〇年三〇年かけてしだいに都市的生活様式や価値観を身につけていった「都市化」のプロセスを表現しているのとらえられるだろう。

さらに、IV「現在の都会」にいる人からみたI「過去のいなか」とIII「現在のいなか」、IV「現在の都会」についてのディスクリブルをとりあげると、幼い頃の思い出、山河や海などの心象風景からなるふるさとのイメージ、「現在」の「いなか」との往来や今後の母村の

意志などを含むふるさと観あるいは「いなか」観と、「現在」の「都会」生活についての感想や評価のような「都会」観をみることでできる。ここには「都市化」された個人の意識がどのようなものであるかが示されているだろう。

以上のようなパースペクティブにもとづいて、世代別のライフ・ヒストリーを具体的に検討してみようと思う。

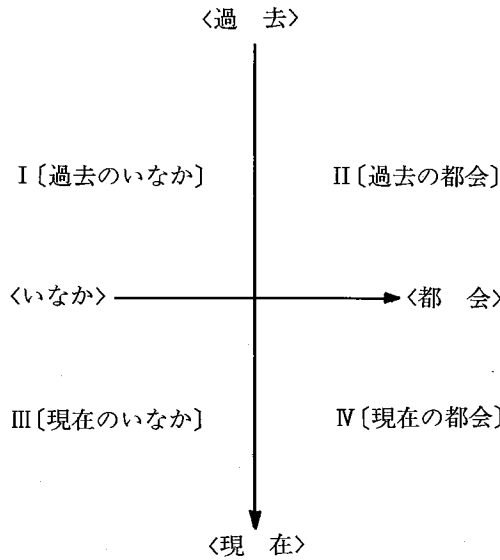


図1 ライフ・ヒストリーにあらわれた4つの象限

三、〈都市化〉のプロセス

本節では、一九一〇年生まれで七〇才代のFさんと一九三二年生まれで五〇才代のYさん、二人の男性のライフ・ヒストリーを分析

の対象とし、I→II→IVという象限の移行のなかに「都市化」のプロセスの特徴をみいだしたい。それに先だって二人の個人史を概観しておく。

(1) Fさん

Fさんは、一九一〇年（明治四三年）に阿鉄で生まれ、阿鉄尋常小学校を経て、一九二五年古仁屋高等小学校を卒業し、一九二七年（昭和二年）に大阪へ来た。まず、うどん屋で三ヶ月でち奉公をし、ついで大阪港の曳きホートの炊事係を約一年し、そして大阪市交通局の「少年車掌」となる。一九三〇年徴兵検査を受け、甲種合格し、翌三一年から三三年まで鹿児島で兵役につき、除隊後、交通局に復職した。一九四一年ふたたび応召し、北満のハイラルで約四年間過ごしたのち、東京、銚子、甲府を経て、大牟田で終戦をむかえた。一九四八年、鹿児島県川内市に疎開していた妻を伴い、二一年ぶりに阿鉄に帰る。しかし終戦後、帰村者が激増して食糧難となつたため阿鉄を離れ、古仁屋で「ヤミ商売」をしていたが、奄美諸島が復帰するうわさが流れるなか、一九五二年四月ふたたび大阪へ来る。大阪にもどっても交通局には復職できず、貿易会社の守衛となり、定年までつとめた。Fさんは、一九五五年に関西阿鉄会を再結成し、初代会長となった人であり、戦前、大阪市港区で「一心会」という名称でできていた阿鉄会の前身についても記憶している貴重な人である。

(2) Yさん

Yさんは、一九三一年（昭和六年）に阿鉄で生まれ育ち、阿鉄で「青年団活動」をしたり、「商売のまね事」をしたりしたのち、一九五八年秋に初めて大阪へ出て、「両親が阿鉄出身の女性と結婚する。いったん阿鉄に帰るが、翌五九年大阪へ移り住む。大阪では、まず兄宅に居候しながら、乳飲料配達の仕事を始め、三年後に店舗をもって独立し、一三年間乳飲料の仕事に携わる。現在では大島紬や温水器の販売を中心とした商業を手がけている。Yさんは、大阪に來て以来ずっと関西阿鉄会にかかりつづけており、一九六八年から七一年にかけて幹事長を、一九七九年から八二年にかけて十一代目の会長をつとめた。会長在任中には、老朽化した阿鉄の集会所を公民館分館として改築することに協力するという母村への財政的援助に力を尽くした。

個人のヒストリーは、C・W・ミルズやD・ベルトラーの指摘⁽³⁾のように、社会変動との連関で把握する視点が不可欠であり、Fさん、Yさんそれぞれのヒストリーも社会史的出来事との相互作用で形成されている。とくにFさんにとって三二才から四二才にかけての二年間は、第二次大戦、終戦そして奄美諸島のアメリカ軍による占領統治、一九五三年一月に復帰という大きな社会史的出来事に直面し、それらがそのままFさんの日常生活を変えた時期であった。このような個人のヒストリーの特徴をふまえたうえで、「都市化」のプロセスをみよう。

(3) Fさんの「都市化」のプロセス

Fさんは、一九二七年、鹿児島を経由して船で約一週間かかって初めて大阪へ来た。

「ぼくらのいなかでは、これという仕事がありませんでしたもんですから、…むかしの高等小学校、あれをでてね、それで出てきたんです。」

最初はうどん屋の「任込みの小間使い」となる。大阪に来てまず苦労したのは言葉であった。

「往生しましたよ、言葉がわからなくて。半年くらいしたら、すぐわかったですけどね。とにかく大阪の言葉が発音が早いでしょ。」

「でっち奉公して最初の頃は、何の仕事がいいかってことを先輩に聞いた。何の仕事がいいかわからないからね。なんでもしましょうわい。見込みのある仕事やったらいいやろ、おやじにいわれてきたんじやがっていうたら、ほんだったらうどん屋がいいんじやないかいいうことで、うどん屋にはいったんです。そしたら、うどん屋にはいったら、全然もう。夜に出前もつていけば、あくる日はどこ行きたやらわからんようになって(笑)。ほな、うだつのあがらないうどん屋におつてもしようがない。そしてすぐやめて港灣の船にのつた。」

三カ月ほどでうどん屋をやめて、大阪港の砂利運搬船にのることになる。一年ほど船で働いたあと、偶然目にとまった募集の貼紙広告をきっかけに、大阪市交通局の「少年車掌」になった。

「でっち奉公では金が少ないからね。お使いが五〇銭しかくれなかつたから。一日と一五日休みでね。そのとき五〇銭しかくれなかつたから。」

た。…そして自分なんかの先輩の方が船乗つとって、こうこうしてボート、ご飯炊く人ほしがつとるから、乗らんかいうから、ほならなんぼくれるねんいうたら、一五円くれるいうから、こりや多いわいうて乗って。そうしてあるあいだにね、市場行くわけです。責任者がおつて、今日は何々買ってこい。何々買ってこいというの。それ紙に書いたのもつて、市場行ってこい。そこに交通局の教習所のあるところに市場があつてね、七条通りいうところ。そしたらそこ通るときにこう見たら、募集っていうのが少年車掌募集いうのが書いてつたからね。それに少年車掌がカーキー色の服着てね、歩けばそれにあれかつこいいな思つて、そして笑話ですけどね、で、入ったんです。」

さらにFさんは「都会」に来て仕事をみつめていく状況を次のように表現している。

「自分はね、もう亡くなつたけど、Aというて自分のおやじの遠縁にあたる人を頼つて…出て来て、そして仕事ない、ほとんどもう住込みですね、…それからつきつきこういうふうに分で、まずそういうでつち奉公で来てあつちこつち、ほんさんやね。あの頃は、ほんさんいよつた。それで自分の好きなものに方向転換していくわけです。足かけに入つて。」

昭和初期の大阪で一〇代だったFさんは、大阪の言葉を覚えつつ、まず住込みを「足かけ」にして、より賃金の高いあるいはより自分の好みにあう職種に移つていった。移つていくときに、同じ阿鉄出身者の「つて」や紹介によることもあつた。奄美の言葉とまつた

異なつた大阪の言葉を習得していくことは、同時に大阪という都市の生活様式や文化も学んでいくことであり、そうして「過去の都会」においてしだいに都市生活に適應していった。この期間は「都市化」の第一段階であるといえる。

第二次大戦から戦後にかけての国家レベルの大きな変動をまともに受けた一二年間が終わつて、一九五七年にふたたび大阪へ来てから、さらに「都市化」のプロセスが進展していく。言葉や生活様式のうえですでに「都市化」はかなり進んでいたが、再度来た「都会」では家族が生きていくための仕事を探す時期があつた。

「昭和二八年か九年頃は、復帰になるいううわさがでてきたんで、返還される奄美群島は。それでそういううわさだったもんだから、復帰になれば、みんながもう阪神方面に出ていくにちがいないというところを見越して、昭和二七年に出てきたんです。それが出てきたところが、また、ここが仕事なかつたんですねえ。むかしの友人を片っ端から探して、あつちこつち行つてもとの交通局に入れてくれてなにしたんですけどね。終戦後、すぐ自分は見に来たんですよ、大阪に。大牟田におつた時代に。そして一応顔だしたもんだから、顔をだしたために自然退職になつてもうたわけです。…それから大阪あたり、どこ行つたつて昭和二八年なんてあるところないです。それでようよう大阪の日綿がね、…あそこに友だちがいて、あそこを紹介してもらつて、あそこ守衛で入つたんです。そして、まあ守衛で入つて給料も安かつたんですけどね。また家内の世話になつて、洋裁してくれたもんだから、そしてあるあいだにポツポツ待遇

もようになりましてね、そして定年までおったんです。」

このように、再度仕事を求める時期を経て、都市での生活の基盤を得、現在の状況に至るプロセスがFさんの「都市化」の第二段階である。その間に都市的な生活様式を身につけるだけでなく、意識や価値観もゆっくりと変容していく。そしてその変容は、たとえば帰村の意志がなくなったり、墓を「都会」で購入したり、という具体的な意識や行動のなかにあらわれてくる。

「墓は、昭和三〇年につくってる。というのね、お墓がいなかにあればね、なんじゃかんじゃ、しきたりが多いからね。お墓だけはこっちで早よ買おうかということで、ちようど売り出しがあったから、そのときにまずお墓だけは買おうかいうて、買ったんです。」

Fさんは、かなり早い時期に墓を購入しており、もはや「いなかな」へは帰らないという意志をもって「都市化」のプロセスを歩んできたことになる。

(4) Yさんの「都市化」のプロセス

Yさんが「都会」・大阪へ来ることになったきっかけは、結婚であった。

「昭和三三年にいったんこっち(大阪)来て、いなかへ呼ぶつもりで。やっぱり都会の人。やっぱり都会の人をもらった私の先輩がおりまして、阿鉄に、その当時の区長さん、Oさんがおられて、私がそういう話したら、お嫁さんがかわいそうだから大阪に行きなさいよ、ということ、だったらそうしようかと思いい立って、何の心の準備

なしに、ちようど一年後にね、こっち私来ました。昭和三三年一月二六日に結婚、こっちに昭和三四年一月一日に来ました。」

Yさんの「都市化」のプロセスも、Fさんと同様に仕事を探すことから始まる。「いなかな」において青年時代から商業にかかわりをもち始めていたYさんは、「都会」でも同様の職業についていくことになる。「都会」で最初に仕事を探した頃のことを鮮明な記憶でつぎのように語っている。

「私、奄美が好きなんもんで、仕事も何もなしに来るもんだから、いなかのバナナ商売なんぞやっていた友だちが、あんたが大阪行くんだったら、奄美の特産物を大阪にはかすパイプ役になってくれんかとそんなことで。お金はないけど。なら、いくらでもあんたが売約束してくれたら、あんた信頼していくらでも送るから、というから、いなかから来てすぐ、ダブダブのズボン着たまま、中央市場行って、友だちの車で送ってもらって、あっちの貿易部長と会って、奄美のバナナを売ってみたらともちかけたら、そしたら一〇〇かごぐらいいっぺん送ってごらんという約束をとったが、奄美の業者にいうたら、一カ月待っても二カ月待っても来ないのよ。やっぱり一〇〇かごとなったらむこうもびっくりしたんでしょね。それで待っていてもどうしようもないし、お金はなくなってくるし。だから、もう家内はおるし。これじゃあかんと思うて、私、商売好きだから、何か商売に関係ある仕事を思うて、二代めの(阿鉄会)会長さんとこに遊びに行った。吹田のほうに。その通りのほうにヤクルトの営業所がある。いうてみようかということになって、いうたら是非

きてくれ。…三日後に面接に行った」。

最初の仕事は乳飲料の配達であった。へいなかへになかったので、配達るとき自転車に乗れなくて困ったという。そして三ヵ月して給与が歩合制になり、生活は苦しかったが、配達数を増やすことにつとめ、三年たつて販売所をもつことになる。

「増やすことを一生懸命やれば、それで収入あがっていくんやからね。そういうことで順調に行つたもんで、三年めに販売所、この近くバス通りに借りて販売所、お金がないのに、…家を借りて借金して、冷蔵庫なんか買うてやるんだから、借金百五十万して」。

販路の拡大につとめ、乳飲料販売の仕事も軌道にのつていたが、一〇年後に販売所をやめることにする。一九七三年、初めてへいなかへに一週間帰省し、それをきっかけに大島紬の販売に転向する。ところが一九七五年頃、借地だった店の土地を立退かなければならないことになる。翌七六年に、酒屋の倉庫だった近くの中古のビルを約三、五〇〇万円で購入し、大阪市淀川区の現在の住居兼事務所をもつた。

「地元の銀行あるでしょ。一千万だしてくれて、それから私がまた一千万、四苦八苦しながらつくつて、それでまだ足らん、あと八百万ほど借りて、二千八百万借りた。ほんとうに苦しかったね。月々五、六十万払っていかなきゃならん。…その間で、商売しながら払っていかなきゃならん、だから、必死ですよ。ようやく来年の二月で一〇年になる、五一年に買った。ずつと大島紬やっていたけど、…それだけじゃということで、温水器とか洗浄器、C製作所の特約

店、それもこのビルがあるおかげでむこうも安心してやってくれ、保証金もなしに」。

ビル購入の借金返済に苦しい一〇年間の終わりが近づいてきていた一九八四年一月に、火事が起こり、母が焼死するという出来事があった。そしてそのときへ都会の郊外の霊園に墓地を買ったという。

Yさんは「いなかの人たちはほんとうにありがたい」という。(過去の都会)から「現在の都会」にいたる過程で遭遇するたとえば求職や転職、「借金」、母の死などのような出来事の際に、「ほんとうに力になってくれる」からである。とくにHさん、Oさんという名前があがったが、へ都会において同郷であることを機縁とする数人の人との親密な人間関係が、長いへ都市化のプロセスのなかで持続されている。彼らは、Yさんの人生においてD・W・プラーズのいうような「道づれ(Convoys)」として位置づけられるだろう。そして「道づれ」ともともにYさんの長いへ都市化のプロセスが進展してきた。

以上のようなFさんとYさんのへ都市化のプロセスの考察をふまえて、つぎの三つのことを指摘できる。

第一に、へ都市化のスタートの明確さである。大正時代初めから大阪への出稼ぎが始まっていたので、三〇代から七〇代のどの人もすでに母村・阿鉄においてへプレ・都市化といえるものが始まっていた。たとえば「大阪はええぞう、おまえもいつべん行ったらえ

えって聞かされていた。大阪の話はよう聞くんですわ」という。しかし「都市化」の出発点である「過去の都会」へ来た最初のときのことは、あまりにも異質な空間を移動したこともあって、FさんにもYさんにも鮮明な記憶として保持されており、豊かなディスクールで表現されている。

第二に、「都市化」のプロセスは、二つの段階にわけてとらえられる。「都市化」の第一の段階とは、II「過去の都会」において「都会」の言葉や生活様式を身につけ、都市で生きていくための仕事を求める時期である。その期間は一年から二年くらいのようなのだ。そして「都市化」の第二の段階は、IIからIV「現在の都会」へ漸次的に進み、都市的な意識や価値観を内在化し、現在の状況にいたる長いプロセスである。そのプロセスを経て、結局「都会」で暮らしたり、「今はいなかの言葉のほうがかえってでにくい」と述べられるような状態に達している。

第三に、「都市化」は「道づれ」とともにすすんでいくことである。彼らにとって「都市化」とは、個人に独自で個別なものというよりも、他の阿鉄出身者の「道づれ」の「都市化」と同時進行しつつ、相互にかかわりながらつくられていくものである。

四、へいなか観と「都会」観

前節のような「都市化」のプロセスを経ていく人たちがどのような意識をもっているのか。その意識を、VI「現在の都会」にいる人

からみた「へいなか」観あるいは「都会」観によって示そうと考える。本節では、一九四七年四八年生まれという三〇才代の関西阿鉄会にかかわる三人の男性へのインタビューで得たディスクールから検討したい。三〇代の人のディスクールをとりあげるのは、I「過去のいなか」やIV「現在の都会」にたいする言及が豊富であったことがおもな理由である。五〇代、七〇代の人たちにそれらについての記憶が欠落していたり言及がなかったわけではない。一対一の対話形式ではなく、同時期の過去を共有する三人へのインタビュー形式をとった結果、M・アルヴァクスが指摘するように、「情緒的コミュニケーション (une communauté affective)」のなかで個人の記憶が活性化され、想起が促された^⑩といえよう。

ここではとくに「へいなか」観に注目したい。なぜならば、「都会」において同郷団体にかかわっている以上、「へいなか」との関係が切れないことや、「都会」についての意見はたえず「へいなか」との対比にもとづいたものであることが想像できるからである。また、ベクトルが「都会」にむかう「都市化」のプロセスが進展していくとき、対極にある「へいなか」がどのような位置づけになっていくのかを探ろうと思うからでもある。

Tさんは一九六二年に、Iさんは一九六三年に、Kさんは一九六七年に大阪へ来た。一五才から一八才のときに「都会」に移り、約二〇年経過した現在、三〇代後半となった彼らはライフ・サイクル上では職業選択、結婚や子どもの出生を経て、家族を形成し、ある程度の安定に達した成人期に入っている。

(1) 「過去のいなか」

一九五〇年代前半、阿鉄は世帯数二二〇戸、人口約六〇〇人の集落であり、一九八五年には三九戸八八人となった現況と比較すると、当時は居住人口のはるかに多いにぎやかな時期であった。一九五〇年代後半になって、阿鉄をはなれる人がどんどんふえていったようであるが、三〇代の彼らはもともと活気のある阿鉄で幼少を過ごしており、互いの話に連鎖して豊かな思い出がつきつきに語りだされていく。

山でメジロ捕りをしたり、海にもぐって貝をとったり、魚つりをしたり、「今、考えてみて、自分で遊びをつくったんですよ」「一番悪いことしましたね」と述懐されるような無邪気な遊びが思いだされる。おとなたちがさとうきびを収穫し、黒糖づくりをするのを手伝ったこと、児童会でハブよけの「用心棒」とよばれる棒づくり村のなかにたてたこと、台風のとき阿鉄の湾に避難してきた船に乗せてもらったこと、校区の運動会では他の部落に対抗意識をもっていたことなど、話題が流れるように続く。

(2) 「現在のいなか」

なつかしきをもって語られる「過去のいなか」はすべてが肯定されるディスクールであるのたいし、「現在のいなか」はちがっている。

まず、彼らは、〈都会〉に移って以来「いなか」へは二、三度しか帰っていないが、その折に目にした「いなか」の姿貌よりは大きな驚

きとなっている。

Tさんは「都会にこう長くおるでしょ、パツと帰るでしょ、(村が)ものすごく小さく感じる。…三分の一くらいの小ささ。道幅とか村全体が。もうすべて。だれでもいいです」と語る。

Kさんも「大阪来てから一〇年ぶりに帰った、五二年に。頭にあるときのイメージとちがっていました。いなかつて当時はものすごく大きくおもっていた。パツと古仁屋からこう来て、道からこうみえる。パツとみたら、ほんとうに小さく感じました。阿鉄の湾って、むかしはとても大きく感じて、はしからはしまで泳いだ。ところが一〇年ぶりに帰って湾をみたら、ほんとに狭いなあと思いました。一〇年ぶりにみると小さくみえる」と述べている。

さらに「畑が荒れ放題になった」「区画整理、全然されてない」「ほんとうにさびれたなあっていうのが第一印象」「全然活気がないね」というような衰退を表現する言葉が多くみられる。Kさんによれば「全体にさびしく感じましたね。それと、われわれがおった頃は道路歩いてたら、必ず村の人と出会っていた。一〇年ぶりに帰ったとき、いない。出会わないですよ。…歩いてないってことは人が少ない。人口が減ってるってことですよね。」

幼少時に体験したものが、本人の成長と時間的隔たりを経て、成人後に狭小に感じることは、儘あることであろう。だが、衰退の印象は人口減少による現実の出来事の反映である。そしてその印象が〈都会〉との対比でより一層強くなるのが指摘されている。

「そりゃあ、都会出て、人口みて意識してるから、そうなるのかも

しれないですけどね。住んでるほうは、それであたりまえに思ってるかもしれない。(Kさん)

だが、「現在のいなか」が、さびしく、活気のない、衰退した状態に変貌していても、三〇代の人たちはみないずれへいなか」に帰りたいいなあという気持ちを抱いていることを表明する。

「老後はぜひいなかでやりたい。(理由は?)理由というよりも、まず風景がきれいってこと。今、うちのおばちゃんをみてるよね、外へ出られない。外へ出ちゃうと車が通ってる。危ない。で、いなかでしたら、自由ですからね、散歩が。そういう危険性が少ないってことで、で、われわれが老人になるとそういう気持ちになるでしょうね。自由に散歩できるあれで、やっぱりいなかで生活したいなあ思うでしょうね。(Kさん)

Tさんは「やっぱりそういうと老後はそれがいいなと思うな。年いって働けなくなったら、いなかで死んだほうが」という。そして「これってという仕事さえあつたら、へいなか」に帰りたいと思ってお、「そのほうが長い目でみたらよろしい、いなか。都会でたいした出世もできないし」とその理由を述べている。

Iさんはかつて本気で「へいなか」に帰ることを考えたことがあるという。「ぼくもいちどき帰ろうと思つたね。それはね、友だちがね、同級生が真珠の仕事やつていた。ま、今でもやつてるけどね。そういう話でたまたま帰ったときに、もう五、六年になるかな、…そういうこと考えたことあるんですわ。一応話だけしてみ、一応帰るつもりで話は聞いてつたんです。…彼にも話した、どないしたほう

がいいかな、いうて。考えてみて、もし帰って何年も遊ぶようなことになれば、なんにもなれへんし、まだこつちであれしようかないうことで。帰ることに心は動いたが、「急に収入がぱつと減りますですよ、そうすると生活がねえ…」というような心配が起こり、結局決断はできなかったという。

実際、「へいなか」に帰ることを具体的に考えると、さまざまな不安もでてくるようだ。生計をたてるだけの仕事があるのか、「なにか産業をおこしてね、定住できるような方法を探そうじゃないかっていうだけでも、一時的にはいいだろうと。でも、二年三年ずうと住んでみると、退屈するんじゃないかとみないうてたけど」とKさんが語るように、退屈するんじゃないか、Tさんがいうように「へ都会」に遅れるんじゃないかというような懸念や不安が生じてくる。それでも「へ都会」の経験をふまえて比較した「へいなか」の生活のよさも主張され、そこに彼らのアンビヴァレントな気持ちをとらえることができる。「一〇人のうち八人ぐらいは、みんなが帰つたら帰ろうっていう気持ちがある。自分だけ帰るっていうのはさびしいからな、だから。(Tさん)

「やっぱり何十年間か都会で生活してみて、あらためていなかのよさがわかりつつありますからね。むこうでは、あたりまえで感じなかつたことが、やっぱりこうやつて都会へ出てみて、生活してみて、いなかの生活のよさがしみじみわかりますね。(Kさん)

(3)「へ都会」と「へいなか」のあいだ

「都会」での生活年数が長くなるにつれ、価値観や態度も「都市化」され、「都会」での生活も安定度を増す。この段階に至ると、「都会」には「いなか」にない多くのものがあることがわかるだけでなく、そのことにたいする評価がでてくる。それは肯定的なものだけではなく、三〇代の人たちがあげた近所づきあいの稀薄さ、親しみのない人間関係、自然の少ない環境などのような否定的な評価もある。同時に「いなか」にも「都会」になかったものがあることがわかってくる。とくに「過去のいなか」はいつでも肯定的なものである。「現在のいなか」もよい状態ではないが、けつして否定されるものではない。だが、「いなか」は、帰りたいが帰るところではないようだ。そのことは、三〇代の人たちよりも五〇代七〇代の人々のディスクリルではつきり表現されている。そして、「過去のいなか」は、「都市化」が進み、「都会」での経験がふえるにつれ、経験の量のうえでも時間的経過のうえでも相対化されたものとなっている。だが、不可逆的な唯一無二な経験でもあり、しだいに表象のなかの存在、イメージとしての「ふるさと」として再組織化されている。

結局、「都市化」されてきた個人の意識の特徴として指摘できるのが、このようなどちらを肯定も否定もできない「都会」と「いなか」へのアンビヴァレントな意識である。このアンビヴァレンスは、「過去のいなか」／「現在のいなか」／「現在の都会」と、わるい「現在のいなか」／よい「現在の都会」という二つの対照的な価値評価で成立しているが、基本的には「都会」へのアンビヴァレントな評価と、「現在」の時点における「過去」への「賞賛的なスタンス」(appreciative stance) [1]

からなっているといえる。

五、ノスタルジーと「集会的記憶」

「都会」に来て二〇年三〇年たった阿鉄出身の人たちのライフ・ヒストリーを分析することによって、「都市化」の諸相をみてきた。第一に、「都会」に移り住み、職業を求めながら、言葉や都市的な生活様式を身につけていく段階があり、ついで徐々に都市的な意識や価値観を内在化していく長いプロセスがある。このプロセスは、ベクトルの先がたえず「都会」にむかいながら現在にいたっているものであるが、彼らのもつアンビヴァレントな意識をみると、同時に「いなか」にむかうベクトルをあわせもっていることがわかる。あるいは対極にむかう両方向へのベクトルをもつがゆえに、そのようなアンビヴァレンスが生じているともいえよう。

このアンビヴァレンスをもつ彼らがかかわる同郷団体は、両方向のベクトルに対応した機能をもっている。すなわち「都市化」のエージェントとしての同郷団体という側面と、「いなか」を媒介する同郷団体という側面をあわせもっている。かつて同郷団体は、「都会」へ来るときの「つて」となったり、知りあいのいない「都会」での「精神的な励み」であったり、都市的な行動様式を教示し「都会」の生活に欠かせない情報を伝えてくれる「都市化」のエージェントとして重要な役割をはたしていた。しかし「都市化」のプロセスが進展した今、この側面の機能は彼らにとってそれほど重要な意味を

もたなくなっていることは事実である。そしてむしろ「へいなか」>と「へ都会」のあいだに介在し、「へいなか」へのノスタルジーをみたく側面での働きが強くなっている。そこで彼らの抱くノスタルジーに焦点をあて、「へ都市化」>されてもお同郷団体にかかわる彼らの心性を考えてみよう。

F・デーヴィスは、ノスタルジーを論じるにあたって、ノスタルジーの対象が現在の状況と比較され肯定的な感情をふきこまれた過去であることをふまえたうえで、ノスタルジーは「我々のアイデンティティを構成し、維持し、再構成する果てしない作業で我々がある手手段の一つ」であるとして、ノスタルジーをアイデンティティの連続性と非連続性という視点から説明することを試みていく¹²。本稿の三節で示したような、I象限とII象限の明確な非連続性、「へ都市化」>という長い変化のプロセス、そして四節で述べた「よい過去／わるい現在」という「内的な対話」の存在、現在の時点で過去の「賞賛的スタンス」、これらの点はデーヴィスがノスタルジー現象を説明するポイントにそのままあてはまるものである。デーヴィスの表現をかりれば、彼らのノスタルジーの特徴は「アイデンティティの連続性」¹³と「特別な過去」¹⁴という二つの点でとくによく理解されうる。

かつてII「過去の都会」において、たとえばTさんが「同級生にね、手紙だしました、もう都会はいい、いなかへ帰りたい」と語ったことから推察できるように、彼らは強い「アイデンティティ・クライシス」を受けたが、「へ都市化」>の第二の段階がかなり進んだ現在

ではこの種のクライシスを感じることはもはやほとんどないだろう。しかし彼らのアイデンティティはI象限からII象限への移行で生じた非連続性を内包しており、「連続性への憧憬」¹⁵がノスタルジックな感情の背景にはある。そこでノスタルジーは、「過去のいなか」で形成されたアイデンティティを今再確認することによってその連続性を促進し、現在の自己を保証することに役立つといえる。

さらにノスタルジーは、たえず現在の状況と対照された過去という「特別な」過去を問題としている。彼らにとっての「特別な」過去とは、否定的なものが排除されて再構成された「過去のいなか」が、現在の状況とりわけ「現在の都会」の否定的な部分と対置されてとらえられたものである。この肯定される「よい過去」対「よこばしくない現在」というノスタルジックな「内的対話」のなかで、むしろ「現在の自己の暗黙の有利さを推論しよう」¹⁶と試みているのである。いずれにしてもノスタルジーは、「へ都市化」>という長い変化のプロセスのなかで現在の自己を保証することに役割をはたしていることになる。

彼らのノスタルジーは、「失われた小さなパラダイス」¹⁷である「過去のいなか」にたいして抱かれるものであるだけでなく、そのノスタルジーは他者と共有できるものであり、集合的ノスタルジーのなかへ溶融できるものであることも大きな特徴である。ノスタルジーを抱くということは、デーヴィスの比喻¹⁸をあてはめれば「望遠レンズ」で拡大し装飾された「過去のいなか」が、まるでゲシュタルト・シルエットの反転のように図としてあらわれ、一時的に「現

在の都会」が地のなかに消えていった状態である。彼らは日常生活のなかでいつもノスタルジックな感情に浸っているわけではない。

少なくとも「年にいっぺん」既述^⑨のような都市における「ふるさと」の一日において、「過去のいなか」の再現のなかで個人のノスタルジーをみることが出来る。この「過去のいなか」の再現とは、意図的に「シルエット」の反転が仕掛けられた場であり、同郷団体が提供する集合的ノスタルジーの表現の場であるといえるだろう。ここで「過去のいなか」への個人的ノスタルジーは、集合的ノスタルジーのなかに溶融されたものとなっている。

もともと同郷団体とは「過去のいなか」に準拠した思い出を集合的にプールするところとしてつくられたものといえる。Fさんは三〇年前に関西阿鉄会をつくった経緯をつぎのように語っている。

「阿鉄から、あんな遠いところから出てきてですね、…なるべくいなかの苦勞を忘れないようにして、年にいっぺんでも思い出を語りあつていこうかいうて、話しおうて、ちようど共鳴してくれる人がおつたもんだから、みな、そうしましよいうことで、二八年頃からかかって約二カ年くらいでようようまとまっただけです。…ふだんはよれないけど、せめていっぺんだけでも寄ろうか。そうすればいなかの苦勞を忘れずに語りあうことができるんじゃないか。」

したがって同郷団体は、同地域出身者たちの「集合的記憶」の装置とみなすことができるだろう。この「集合的記憶」とは、アルヴアクスによれば「その集団の個々人に共有された思い出の塊であり、これらの思い出は互いを拠りどころとしている」ものであり、個人

が思い出を想起し、確認し、確かにし、欠落を埋めるための手がかりとするものであるという^⑩。だから日常生活のなかでは想起されない「過去のいなか」の思い出も、「望むときに自由に入りこめる集団のなかで、いつも親密な関係にある集合的思考において、保たれているから」^⑪、つまり同郷団体が保持してくれている「集合的記憶」を媒介にしてよびおこすことができ、あいまいな思い出も活性化され確かなものとなる。あるいは彼らは「現在の都会」において個人の「過去のいなか」の思い出をこの「集合的記憶」の装置に預けておき、ときに同郷団体にかかわって、思い出を喚起しノスタルジーにひたることができる。

しかし他方で、「集合的記憶」とは「個人の記憶を包みこむが、個人の記憶とまぜあわされない」ものであり、「その集合的記憶のもつ法則にのっとって進化していく」ものである^⑫。このアルヴアクスの指摘する「集合的記憶」の外在性は、あとから集団に参入するものにとつては、一つの障壁となっている。三〇代のKさんは来阪当初、すぐに阿鉄会にかかわれなかったときのことをつぎのように語っている。

「ぼくなんかも最初の頃はこういう会があるというので行ったことあるんですよ。そしたらほとんど顔がわかんないんですよ、先輩たちのね。だからあまり楽しみみていうのはなかったですね。」

しかしその後Kさんは積極的に阿鉄会にかかわるようになり、現在では「青年部長」をつとめている。「集合的記憶」を共有できるようになったとき、この集団の一部となったといえる。そして「集

合的記憶」の継承と保持に加担するようになる。

「ぼくが一番そういった会に率先して参加しようと思うのは、いずれわれわれが四〇、五〇になったときにそういう会はまだ残っているわけですよ。せっかく先輩がつくりあげたものを引継いでいないということでは途切れたらたいへんだから、なんとかなんらかの残していかなくちゃいけないと、われわれの年代が率先してやらないと。」

このようにKさんは語っているが、同郷団体のもつ「集合的記憶」には「過去のいなか」のことだけでなく「過去の都会」のことも含まれており、この「集合的記憶」を内在化し共有に加わっていくことと自体、あとから参入した彼らにとっての「都市化」のプロセスの重要な一面であるといえるだろう⁽³⁾。以上のような考察を通して、「都会」といへなかのあいだで、「都市化」された人たちが、自己の「現在」を保証しつつ、「過去」といへなかへのノスタルジーを同郷団体という「集合的記憶」の装置でコントロールしながら生きていけるさまがうかがいあがってくるのである。

注

- (1) 関西阿鉄会は、阪神都市圏に居住する鹿児島県大島郡瀬戸内町阿鉄出身者のつくる同郷団体である(図2参照)。阿鉄から大阪への移動は、一九一七、八年頃から始まり、当時おもに大阪湾岸の重化学工業地帯で働いていた阿鉄出身者たちは、大阪市港区の安治川沿いに多く住んでいて、「一心会」と称した会をつくっていたが、戦争によってまったく消滅したという。戦後一九五五年に「阿鉄親生会」という名称で新たに会がつくられ、その後一九六八年に関西阿鉄会という現在の名称になる。一九八五年十月現在、

所帯数二二〇、総数三三二人、居住地は関西一円に広がっているが、大阪市東淀川区、淀川区、吹田市、豊中市という大阪市北部から北摂にかけての地域で五八所帯、全体の26.4%を占めていることが特徴である(阿鉄会創立三十周年記念誌より)(阪神都市圏における居住分布の状況については図3参照)。会員の職業に偏りはないという。会費は年三千円で、新年会と十月の総会をおもな年間の行事としている。なお、関西以外の阿鉄出身者の同郷団体は、関東阿鉄会(四二所帯)、名瀬市在住阿鉄会(二三所帯)、古仁屋在住阿鉄会(三四所帯)と他に三つあるが、関西阿鉄会がもっとも長い歴史をもち、規模も大きい。

(2) 拙稿「都市のなかの『ふるさと』—京阪神芝会の日—」『年報人間科学』第七号、一九八六年、一七—三五頁。

(3) 「瀬戸内町勢要覧 昭和五九年版」瀬戸内町役場、昭和六〇年。

(4) 心性(mentality)については、宮島喬「フランス社会学派と集合意識論—歴史における『心性』の問題にふれて」、『思想』六六三号、一九七九年参照。

(5) 本稿で用いるライフ・ヒストリーのインタヴューは、七〇代のFさんには一九八五年六月二六日大阪市北区で、五〇代のYさんには一九八五年六月三日大阪市淀川区で、三〇代のKさんTさんIさんには一九八五年六月三〇日大阪市淀川区で、筆者がおこなったものである。また、関西阿鉄会の会合は、一九八五年一月四日大阪市淀川区での「新年会」、一〇月一三日尼崎市での「総会」、六月一六日大阪市東淀川区と七月二一日豊中市の会長Sさん宅での「役員会」に参加し取材した。会長のSさん、前会長のEさんはじめ関西阿鉄会の多くの方々の御協力を得ました。記して心から謝意を表します。なお本稿は、一九八四年度トヨタ財団個人奨励研究助成の成果の一部である。

(6) Bertaux, Daniel, "L'approche biographique. Sa validité, méthodologique, ses potentialités," *Cahiers internationaux de Sociologie*, vol. 69, 1980, pp. 197-225.

Bertaux, D., "The Life Story Approach: A continental view," *A. J. S.*, vol. 10, 1984, pp. 215-237.

(7) C・W・ミルズ『社会学的想像力』鈴木広訳、紀伊国屋書店、一九六五年。

(8) ミルズ 前掲書、一八八頁。

Bertaux, D., op. cit., 1980, pp212—217.

(9) D・W・ブラース『日本人の生き方—現代における成熟のドラマ—』

(Plath, D・W., "Long Engagements—Maturity in Modern Japan—",

1980) 井上俊・杉野目康子訳、岩波書店、一九八五年、二四頁、三二九—三三三頁。

ブラースによれば、「道づれ」(convoys)とは「ある人の人生のある段階を通じてずっとその人とともに旅をしていく親密な人びとの独特の集団を指す。『そして』私たちが道づれたたちの人生に影響を与えるように道づれたちもまた、さまざまな形で私たちの人生に重大な影響を与え、私たちはいわば道づれたちよってつくられていくのである」という。本稿でとりあげたような人生の途中で都市社会に参入した彼らの場合、ライフ・コースの方向指示してくれる「文化的道筋」(paths)として、伝統的な奄美社会で共有されていたものを指針とすることができなかった。したがってとくに阿鉄出身の「道づれ」たちとの緊密な結合のなかで相互に「道筋」を確認しあいながら長い「都市化」のプロセスを歩むことが必要であった。

(9) Halbwachs, Maurice, "La Mémoire Collective," "Presses Universitaires de France, 1950, pp. 11—15.

(11) Davis, Fred, "Yearning For Yesterday—A Sociology of Nostalgia—",

The Free Press, 1979, pp35—37.

(12) *ibid.*, pp35—37. なお F・デーヴィスのノスタルジー論については、細辻

恵子「ノスタルジーの諸相」作田啓一・富永茂樹『自尊と懐疑—文芸社会学をめがけて』筑摩書房、一九八四年、一〇一—一二八頁、参照。

(13) Davis, F., op. cit., pp31—50.

(14) *ibid.*, pp13—16.

(15) *ibid.*, pp49—50.

(16) *ibid.*, p46.

(17) *ibid.*, p46.

(18) *ibid.*, p58.

(19) 前掲拙稿「都市のなかの『ふるさと』—京阪神芝会の一—」一九八六年。

(20) Halbwachs, M., op. cit. 1950, P33.

(21) *ibid.*, pp35—36.

(22) *ibid.*, pp31—32.

アルヴァクスの記憶の論議のなかにノスタルジーの概念をとらえたものとして次のものがある。Vromen, S., "Maurice Halbwachs and the Concept of Nostalgia," *Knowledge and Studies in the Sociology of Culture Past and Present*, vol. 6, 1986, pp55—66.

(23) 三〇代の K さん T さん I さんらは、居住地がそれぞれ奈良市、東大阪市、豊中市とバラバラであるにもかかわらず、一カ月に数回は会っているという。同郷団体の「集合的記憶」はどの人もすべて共有できるわけではない。たとえば世代が異なれば「過去のいなか」の思い出も少しずつ違ったものとなっている。だから規模の大きくなった同郷団体よりも同級生や幼なじみのような「道づれ」たちでつくる「情緒的コミュニティ」のほうが、彼らの「集合的記憶」を保持するにはより適切な装置となっており、そのなかでのほうがよりノスタルジックな情緒を表出しやすいことを指摘でき

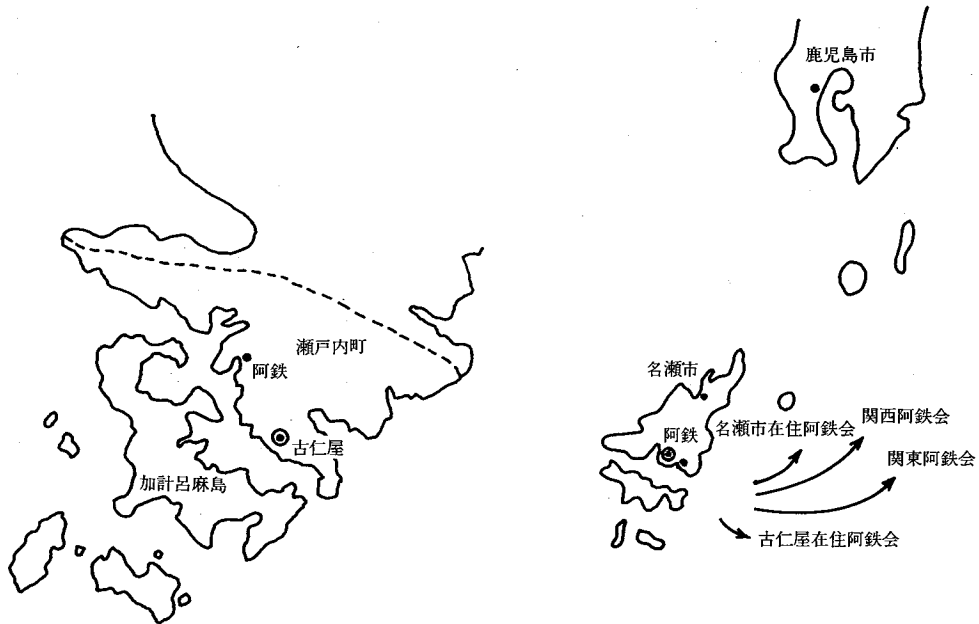


図2. 瀬戸内町阿鉄と阿鉄を出た人たちの行き先

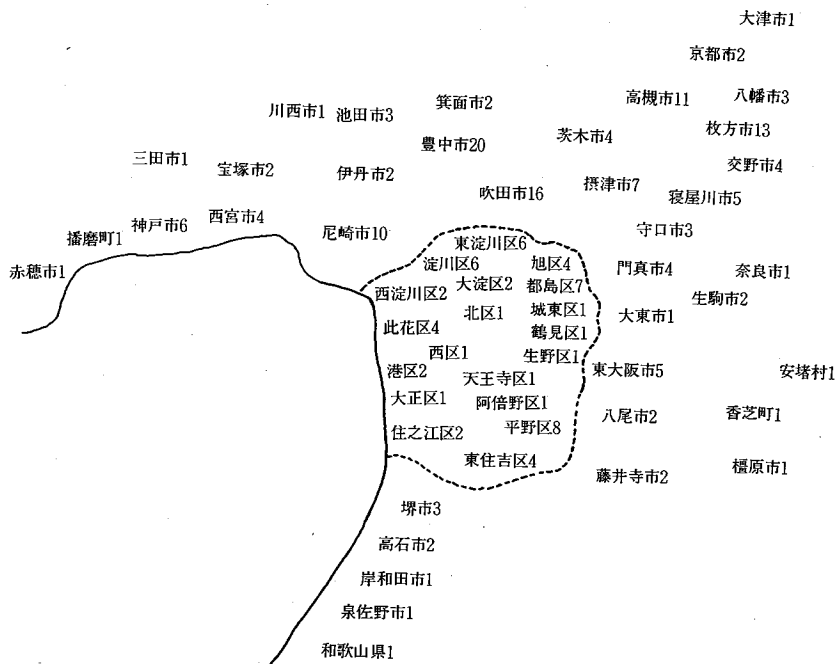


図3. 関西阿鉄会220世帯の居住地域(『阿鉄会創立30周年記念誌』1985年10月より作成)